

安全への提言

|||||



会誌「安全工学」によせて

くま さき み え こ †
熊 崎 美 枝 子 †

2024年度より会誌「安全工学」の編集委員会委員長を務めております。本誌は本会の知的基盤であり研究成果や安全工学にかかわる様々なトピックスを発信する媒体です。本誌を継続して発行されてきた歴代の委員長および委員の皆様のご努力に敬意を表しまして、微力ではございますが会誌の充実に尽力して参りたいと考えております。短い期間ではございますが、どうぞよろしく願いいたします。

私が安全工学会に入会したのは、博士号を取得し社会人として第一歩を踏み出した年だったように記憶しております。エネルギー物質化学分野で学位を取ったのち、産業安全の研究を進めてゆくこととなり、自分の専門分野を「安全工学」に広げてゆく過程を、本会会員として過ごしてまいりました。

さらに振り返りますと、私が「安全」を最初に意識したのは、高校生の頃だったように思います。書籍か新聞記事か媒体は忘れてしまいましたが、米国におけるサリドマイド禍をフランシス・ケルシー博士が最小限に食い止めた、という話に触れる機会がありました。サリドマイドは催奇形性があり、妊婦が服用すると胎児に深刻な影響を与える物質で、世界中で約一万人の胎児が被害を受けた薬害事件を引き起こした物質です。薬害の状況は様々に報道されたほか、ドラマ化されるなどしており、視聴した私自身も強い印象を受けていました。博士の功績は、医薬品の市販に認可を与える審査を行う立場にあって、安全性のエビデンスがない状態での市販を許可しなかった点です。その結果、米国内での薬害を最小限に抑えることができました。高校生の心にも、「科学的な知見で安全にすることができる」ということは強い印象を与えました。

現在、私は産業安全を主な研究分野の1つとしてい

ますが、現代社会において「安全であること」は、これまでも増して重要な価値を持つようになっていると感じています。技術の高度化や社会システムの複雑化が進む中で、ひとたび事故や不具合が発生した場合の影響は広範囲かつ深刻なものになりがちです。その一方で、社会や産業の現場では、効率性や即応性が強く求められており、安全であるかどうかの判断や、一度危険と判断された場合の対策による安全確保と環境要因との調和の維持はますます難しい課題となっています。

私が高校生の時に見ていた狭い社会と比較して、実際の社会はきわめて複雑であり、限られた情報や時間の中で科学的知見をもって「安全である」「危険である」と明確に判断することは容易ではありません。ISOによる安全の定義は「許容できないリスクがないこと」ですが、物理的空間、時間枠、主体等、スコープをどこまで広げるによって、その判断が変わることがあります。このような不確実性や多面性を抱えた状況こそが、安全工学の研究対象であり、同時にその難しさでもあると言えるでしょう。もちろん、その難しさこそが安全工学の学問的魅力でもあります。

だからこそ、より多くの危険源を議題にし、多様な視点から検討を重ねる場として、安全工学会の果たす役割はきわめて重要と考えます。その中でも会誌は、安全に関わる広範な分野の研究成果を蓄積・共有し、次の知見へとつなげていく中核的な存在です。会員の皆さまには、インプットとしてのみならず、ぜひご自身の知見や経験を積極的に共有していただく場として会誌をご活用いただきたいと存じます。そのような知的交流を支える会誌となりますよう、今後ともご支援とご協力を賜りたく、心よりお願い申し上げます。

† 横浜国立大学：〒240-8501 神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-7